

Fate/Ouroboros

源氏物語・葵尋人・物の怪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは獣が檻を欲する物語。

聖杯大戦に於いてアストルフオを召喚したセレニケは我欲を暴走させた末、不慮の事故とも言える形で敗退した。

これが正しい歴史。

しかしこの世界線は違う。

もしかしたらあつたかもしれない選択。

セレニケが召喚したのは蛇と共に現れた中華の英雄だった。

目次

24	F a t e / O u r o b o r o s	陰
	F a t e / O u r o b o r o s	1

F a t e / O u r o b o r o s

我は一つの狂った獣

病毒の風を撒き散らしながら

己を捉える檻を欲す

†

つまらない人生だった。

屹度、自分がレーズンのように干からびた老婆になるまで人生を続けたとして最後に
呟く言葉はそれだろう。

そういう自負がセレニケ・アイスコル・ユグドミレニアにはあった。

アイスコル家の工房に一人、ふと生贄に使う鳩や兎を入れた檻を見るといつもそんな
センチメンタリズムに駆られるのだ。

『私はまるでこの哀れな犠牲者達と同じ』だと己の中の己がせせら笑っているかのよ
うに。

黒魔術師の家に生まれ幼い頃から徹底した教育の下に育てられた。黒魔術という魔
術は鳥や小動物、時には人を生贄に捧げるといふ性質を持つ為、あるほの暗い資質が使

用者に求められる。

それは躊躇わないこと。それがいかなる懇願をしようとも解体し切る非情さ。

そして昂らないこと。それがいかに淫靡な悲鳴で蠱惑しようとする遣り過ぎない沈着さ。

その両方を備えて初めて黒魔術師は黒魔術師である。そして、セレニケはアイスコル家の老婆たちにそのようになることを義務付けられて生きてきた。

セレニケは魔術的な才能に恵まれた子供であった。中世、魔女狩りから逃れシベリアに流れてきた過程でそれまでの土地で築き上げた魔術基盤を失い衰退していたアイスコル家の期待の一心を背負えるほどに。

セレニケはこの期待に応えることが出来る子供であった。老婆たちが授けた教えを総て全う出来るほどに。

間違いがあつたとすれば、期待に応える才能と同時に倒錯的な情欲を持って生まれてきてしまったことだろう。

故に一端魔術から離れた時にはその情欲が噴き出した。一夜を共にした男を傷つけた。犯し、血で汚し、涙を流しながら紡がれる苦痛に酔いしれた。

けれど、その情欲が満たされることはなかった。床の上にあつてセレニケは我慢を知らない女だった。そして、我慢を知らない為にどこをどうすれば死なないかに頓着が出来る。彼女の愛撫はあまりにも痛すぎた。有り体に言ってしまうえば、セレニケが達す

るよりも男が逝つてしまふのが早いのである。

——勿論、ここでの逝くというのは逝去という意味合いで使われる。

そんな悶々とした日々が転機が訪れたのは、ユグドミレニアの長が永らく温めていた計画を実行に移したその瞬間。

セレニケの右手に赤黒い刺青のようなものが現れたのだ。曰くそれは聖杯戦争のマスターに選ばれた証だという。

聖杯戦争とは万能の願望器たる聖杯を巡つてマスターと呼ばれる七人のマスターがそれぞれサーヴァントと呼ばれる使い魔を召喚し殺しあう儀式のことである。

とはいえ、今回行われる筈の儀式は、マスター全員が名前にユグドミレニアを持つ者、名前にそれを持たなくともそこに属する者であるため戦いにはならないだろう。既に斜陽に向かう魔術師の家系や力を持たない新興の魔術師がダーニツクという失脚した魔術師の下に集つた烏合の衆こそがユグドミレニア。詰りは全員が身内も同然なのだ。そんな状況下では戦いなど起きる筈がない。

——というのが前提であつた。

「ダーニツクが満願の成就を確信し緩んだところを付いて殺し、ユグドミレニアの実権を握る。」

無論、一見安全が保障されていそうな計画というものにはどこかしらに綻びがあるも

のだ。

そして、アイスコルの家の地下に設営された工房の壁に寄りかかるセレニケの眼鏡の奥の瞳はまさにその綻びにならんとする者を捉える。

蠟燭の青白い炎以外に灯りの無い工房の扉が開き、差し込んだ外の光が映し出したのは美貌の人という呼び方が似つかわしいセレニケと血が繋がっているとは思えない程醜い老婆であった。腰が鋭角に折れ曲がり、落ち窪んだ瞳は古井戸を覗き込んだ時のような気味の悪い深淵を見せる。

体を支える杖の代わりに突く、ピンクレースの日傘だけが可愛らしく明る気ですれが
一層に不気味に映った。

彼女こそセレニケに苛烈なまでに黒魔術を教育したその人。名をメリーウエザー・アイスコル・ユグドミレニアという。

「突然どうしたんだい。可愛いセレニケ」

「本当にこんなことが上手く行くか心配になったのよ、メリーおばあちやま」

セレニケは微笑みを返した。

この計画はメリーウエザーが発案したものであった。尤もメリーウエザーにしてみればユグドミレニアの実権などはどうでもいいことだった。

ただ、いつまでもアイスコルの家が何かの傘下にあることが気に食わない。どうせな

らば支配される側でなく支配する側でいたい。

そんなつまらない尊大な羞恥心の権化がメリーウエザーであった。

「私を誰だと思っているんだい？　アイスコルのメリーウエザーだよ？」

粘っこい笑みと共に吐き出されたのは並み一通りの答えであった。

反吐が出るほどつまらない女と、セレニケは彼女のことを内心で酷く罵った。

セレニケは彼女のことを、態度として現れないことが不思議な程に激しく嫌っていた。

つまらないことしか言わない支配欲だけの醜い老婆を好きになる人間はいないだろう。自分に対し教育と称して虐待紛いの修行をさせた人を好きになれる感性はまともではないだろう。

だが、それ以上にセレニケは彼女の中に自分を感じるのが何より嫌だった。

閨で露わになる倒錯した支配欲は年々と酷くなっているという自覚があるし、それに溺れて楽になろうとしている自分がいるのも分かる。そしてそうなった時、自分はこの老婆になるのだ。

それを思うと寒気がしてならなかった。自分がつまらないと感じるものが自分自身だと自覚させられるのはとても厭だった。

「……見つかつたのね。串刺し公に対抗出来る英霊に纏わる聖遺物が」

これ以上そこに意識を向けるとそろそろ態度に現れる恐れがあったから、セレニケは祖母の不敵さの理由について言及する。

それは老婆の懐にあつて、布に包まれていた。形状としては長細く、大きさは老婆が杖代わりになっている傘とあまり変わらないように思われた。

「勿論」

満面の気色と共に老婆は布の包みを解き、セレニケにそれを差し出した。

鞘に収められた剣であつた。刀剣についてはあまり明るくないセレニケではあつたが、なんとなくそれが中華風の意匠であるという感想を抱く。

興味本位で鞘を剣から抜いてみると、

「二本？」

その剣は二つに分かれた。鎬が片側にしかない、歪な形状の剣が背中合わせになつて一本の剣のように鞘に収まっていたのだ。

「太極——あちらの術理に於ける根源みたいなものかねえ。その剣はそれを現して陰陽一对の夫婦剣なんだと」

「剣に纏わる経緯は良いのです。これの持ち主は一体誰なの、おばあちゃま？」

「高祖……と言えば分かるかねえ？」

その言葉にセレニケは俄かに目を見開いた。

サーヴァントというのは歴史や神話に存在した英雄に由来する「英霊」なる高次元の一面面を抽出した極めて強大な使い魔であるが狙った英霊を呼び出すにはその英霊に由来する聖遺物が必要となる。

その英雄が身に付けていたものやその英雄の逸話に縁のある物品である。

例えば、聖ペテロをサーヴァントとして呼び出すのであれば彼が身に着けていた剣や彼の処刑に使われた十字架が聖遺物となり得るだろう。

そして基本的に神秘の蓄積した古い時代の英霊が強く、知名度が高い英霊が強いのだが、そういった英霊の聖遺物は総じて発見が難しいのが常だ。

例えば高祖——劉邦の聖遺物ともなればその入手にどれほどの困難があつたかは想像に難くもない。

劉邦——中国にあつては前漢時代を築き上げた名立たる皇帝であり、赤竜の子と謳われた大英雄である。強力な英霊であることは間違いない。

「成程。確かにダーニツクの召喚するヴラド公にも対抗出来るかもしれないですね」
 ダーニツクが召喚するサーヴァントはヴラド三世。イスラム世界に於いてはその苛烈な姿勢から串刺し公と恐れられ、後世では吸血鬼ドラキュラのモチーフとされた人物である。

ルーミアニアでは侵略者の脅威から国を救おうとした英雄として称えられており、そし

て此度の聖杯戦争の舞台はルーマニア。

サーヴァントの強さは、その国に於ける知名度に補正を受ける。ためヴラド三世はこの聖杯戦争にあつては最強の存在となり、メリーウエザーの計画を遂げる上では最大の障害となり得る。

「出来るかもじゃあないんだよ。出来るんだよ。可愛い私のセレニケなら！」

だが、メリーウエザーは失敗など考えてはいなかった。否、失敗を考へることが出来なかつた。

万事が万事自分の思い通りになると思っている。そうならなければ気が済まないし、そうならないと癪癪を起すのだ。

「……おばあちやまのご期待に添えるように頑張りますわ」

心のうちではいつか殺してやると思いながらセレニケは笑み返す。

「早速召喚の準備に取り掛かろうかねえ」

そんなセレニケの内側は、逸る気持ちを前にしたメリーウエザーには映らなかつた。

工房の戸棚から強盗のような手つきで血を練つて作ったチョークを引っ張り出すと、メリーウエザーは床に英霊召喚の陣を描き始めた。彼女の様子はまるで遊園地を前に浮かれる子供そのものであつた。そんな調子に辟易としながらもセレニケはメリーウエザーに合わせて陣を描く。

聖杯の寄るべに従い、この意この理に従うならば答えよ」

詠唱を重ねるごとに召喚陣が光を帯びる。

工房を包むのは毒々しい紫の光。

繋がっているのだ。『座』と呼ばれる世界に於ける幽世かくりよに。英霊が存在する場所に。詠唱が、魔術回路を駆ける魔力が神話や歴史に刻まれた存在達を現世うつしよに招き寄せる。

「——誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

沃素のような色をしたぬらぬらとした気味の悪い光が一層に強くなる。

いよいよセレニケの目の前に魔術を超える存在が現れようとしていた。

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

一氣に最後の言葉を告げる。

そして爆裂した魔力光の中から現れた男を前にメリーウエザーは驚嘆の声を上げた。

天を衝くような巨躯を持った白髪の男であった。黒白が逆転しているようにも見え、双眸は黒目がちで艶やかな双眸。顔を斜めに走る大きな傷。蛇の皮衣を身に纏い、はだけた胸の筋肉は鎧のように頑強であった。

ブロンズ像のようにも見える蛇が体に纏わりついていたがチロチロと舌をうねらせていることからその蛇が生きていることが分かる。

——何よ、この男。

一目その男を見るや否やセレニケは生理的な嫌悪感を覚えた。見ていただけで首に手が掛かるような、身の危険を感じさせる独特な殺気を帯びている。

誰かに対して危険だとか怖いだとかそういった感情を抱くことは今まで幾度と無くあつたセレニケだったがこれより上はなかつた。

直感する。この男は危険だと。

「おお、素晴らしい。これが本物の高祖劉邦か！」

しかし、現れたサーヴァントに歓喜し、冷静な判断能力を欠いてしまっているメリーウエザーは男の持つ危険性にはまるで目が入っていないようだった。

足元に縋り付くように近づいてきたメリーウエザーを見るや、男が苦虫を噛み潰したような表情をしたのにも気が付かない。

——自身の首が宙を舞つたその瞬間になつてさきも。

あまりにも唐突な出来事であつた。男は平手打ちでメリーウエザーの首を吹き飛ばしたのだ。霊核である心臓を潰されない限りは中々死ぬことがないとされる魔術師とはいえ、流石にこれは死ぬ。

「赤龍を、高祖劉邦を俺などと間違うな」

男にしてみれば老婆の言葉が気に食わなかつたのだろう。

と、セレニケは想像した。想像出来はしたが、それでも男の行動は理解の範疇を超え

ていた。

いくら気に障る言葉を言われたからと言って、見ず知らずの人間を容易く殺すことが出来るだろうか？

魔術師という生き物は基本的に、研鑽や実利の為であれば簡単に人を殺すことが出来る人非人ばかりであるが——否、そういった非情な生き物だからこそこの男の行動原理はまるで理解出来ない。

この行動には男にとって利益がない。怒りを晴らすといってもこれは明らかに度が過ぎている。

——駄目だ。この男は駄目だ。今ここで殺すしかない。

セレニケはそう確信した。

殺意に至るまでが短絡に過ぎる。如何してそれが殺意につながるのかセレニケにとってはまるで理解が出来ない。最悪の場合息の仕方が気に入らないだとか、使っている香水の匂いが好みではないとかさういった理由ですら自分が死ぬ十分な理由足り得るかもしれないのだ。

加えてメリーウエザーが死んだ以上、自分には戦う理由がなくなつたのだ。リスクを抱えてまで戦う必要はない。

そう判断しながらセレニケは右手に宿る令呪を見る。これは強大な魔力の塊であり、

サーヴァントに対する三度までの絶対命令権である。

自分の下に来いと言えばサーヴァントは距離を無視して自分のいる場所まで転移することが出来るし、次の攻撃に全霊を賭けると言えばそのような行動をサーヴァントの意志を無視して行わせることが出来る。

自害を命令させることすら例外ではない。

「令呪を以って命じる……」

今まさにその自害を命令しようとしたその時だった。

セレニケの意識はここで途切れた。

†

セレニケが目を覚めたのはダイニングテーブルの上であった。

身動きが取れない。何か口が口挟まって口を利くことすら出来ない。ふと横に目を遣り、セレニケはつい悲鳴を上げそうになった。

舌をチロチロと揺らしながら退屈そうに微睡む蟒蛇の顔がそこにあったのだ。筆舌すべきはその蛇の頭の大きさ。セレニケの頭とほぼ同サイズだ。

そう——セレニケの体はこの蛇に巻き付かれ動きを封じられていたのだ。

——あの男の連れていた蛇か。

セレニケは召喚したサーヴァントが蛇を連れていたのを思い出した。

英霊である以上その逸話や伝承に由来する武具や能力の具象化である宝具を持つ。あの蛇もきつとその類なのだろう。動物や幻想種と呼ばれる神秘を帯びた生物を所有する逸話を持つ英霊もおりそういったものも宝具となることがあることはセレニケの知識の中にもあった。

——これがそういうものだとすると……。

肉体強化の術式で無理矢理蛇の体を引きちぎろうとする。だが蛇の体はまるで金属で出来ているかのように固く抜け出すことは叶わなかった。

——やっぱりダメか。

となれば蛇による拘束を解く方法は蛇の主であろうあの男に頼る他ない。セレニケはそう思い男を探した。

蛇がいる方向とは逆に首を向ける。ここが自宅のダイニングであればその方向にはキッチンがある筈だった。

意外にも男はすぐに見つかった。何やらキッチンで作業をしているようだった。

「ああ、目が覚めたか」

セレニケの視線に気づいた男は手を止める。

「勝手に厨房を借りていたが、あまり喧しいことは言わんでくれ。酒の肴を作っていただけだ」

そういつて彼はセレニケの私物の白ワインと何かが盛り付けられた皿を持ってキツチンから出てきた。

皿の上に乗っていたのは雑に切り分けられた桃色の肉だった。

セレニケはその色に見覚えがあった。いつも見ているものだ。黒魔術の生贄に使う鳩の肉である。

——キツチン生贄用の動物を酒のつまみにしたことを悪びれる気はないのか。

「確かに盗みの類にあたるか。いかんな。つい己が好いているからと新鮮な鳥肉を求めてしまった」

などと言いながら男は鳥の肉を一つまみし、もきゅもきゅと咀嚼する。

——というか、アナタ、私の考えてることが分かるのね。

千里眼か読心の異能でも持っているのだろうかとセレニケは想像した。

「そういう術が使えるというだけだ。仙人に師事していたこともあった故な」

その答えてセレニケは確信を得る。

高祖劉邦が自分と間違われたことに憤ったことと仙人の弟子だという主張。高祖劉邦には仙人に纏わる逸話は存在しない。

では、この男の正体は？

男はまるで水のように白ワインをがぶ飲みするとその疑問に答えた。

「……紹介が遅れたな。サーヴァント、アサシン。姓は張、名は飛。字は益徳という。高祖とは似ても似つかぬ、武にしか能のない愚物よ」

セレニケは西洋人である。中華の歴史についての知識はあまり多くはない。

そのあまり多くはない知識が導き出すのは、張飛益徳という人物が三国時代の中国に実在した蜀の武将であるということ。そして蜀の王劉備玄徳、世界各地で崇められている財務神関羽雲長との間に義兄弟の契りを交わした「桃園の誓い」の逸話を持つ人物であるということぐらいなものであった。

しかし、すると疑問が生れる。張飛が生きた三国時代と高祖劉邦が生きた時代では凡そ五百年の隔たりがある。

触媒に使ったものは間違いなく高祖劉邦の剣だ。それなのに何故張飛が召喚されるのか。

加えてクラスについても疑問が生じる。聖杯戦争に於いては、アサシンのクラスで招かれるサーヴァントはハサン・サツバーハで固定される。召喚陣や詠唱を一工夫することとでハサン以外のサーヴァントを呼ぶことも可能であるが、セレニケの召喚式は通常形式に則ったものであった。

「ああ、俺が呼ばれた理由だが……」

その疑問について張飛は壁に立て掛けた高祖の剣を手に取り、

「恐らくこれが原因だ」

と答えた。

「この剣は確かに高祖劉邦の剣——白帝の化身である白蛇を切ったまきにその剣である。が、時が流れ中山靖王に、更に時が流れその子孫である劉備玄德にまで流れ着いたという経緯が存在するのだ」

それが何故、張飛が召喚される理由とどう関係するのかセレニケには分からなかった。

「……俺がまだ肉の体を持っていた頃の話だ。黄巾党という連中が中原を荒らしていた。奴らの勢いがまだ盛んだった頃の劉備玄德は片田舎の蓆織りむしろで作った蓆を各地で売っていた。そんな行商を続けていたある日の帰り道で、運悪く黄巾党に出くわした。更に運が悪いことにあの男は故郷の母親に飲ませるための茶を持っていた。茶は高価な代物でな。そんなものを持っていれば捕まるのは当然の帰結だった。何しろ連中は金品財宝と見れば飛びつき奪っていく蝗だ」

——劉備玄德という男は大馬鹿野郎だったのね。

悪態という名目でセレニケは張飛の生前の主を罵ったが、張飛は意外にも嬉しそうに笑った。

「ああ、とんだ戯けよ。だが、そんな戯けを助けた酔狂もいた。暴れられる場所を探し訪

徨つてついには黄巾党にまで流れた破落戸ごろつきが一時の気紛れでその馬鹿を助けた」

——そのゴロツキというのが。

張飛は苦笑交じりに答えた。

「語るに及ばず。お笑い種はここからだ。あの男、助けられると泣きながら跪いてな。『ああ、貴方はなんと立派な豪傑なんだ。きっと大事を為す人に違いない。どうか私の剣を受け取って欲しい。こんなでくの坊の腰に佩かれているよりもずっと人々の役に立つだろから！』……と、このような調子で。見込み違いも甚だしいと思つたが、俺が受け取るまで天地がひっくり返ろうとそこから動かないといった気迫だな。仕方なく受け取つたというわけだ」

今の話が本当であれば劉邦の剣との縁は説明が付く。

だが、まだアサシンのクラスで呼ばれる理由の方が分からない。

「……あのババア、さつき俺が殺したアレだ。恐らくアレが悪い」

——おばあちゃまが？

セレニケの疑問に張飛はクツクツと笑声を漏らした。

「余程、興奮していたのだろうな。召喚の陣を微妙に描き間違えていた」

張飛はまた鳥肉をつまんだ。

なんのことはない。ただのチョンボである。

「……しかし、恐らく俺が呼ばれたことに關しては陣が原因ではないな」

張飛は白ワインをあおり、テーブルに瓶を叩きつけると、身を乗り出してセレニケの眼前に自分の顔を近づける。

セレニケは一瞬息苦しさに似た奇妙な感覚を覚えた。

そして、ここで初めて気が付いたが、この張飛という男は存外に整った顔立ちをしていた。

セレニケの好みからは外れるが、それでも自分をじろじろと間近で監察されている不快感が多少なりとも緩和されるといふものだ。

——でも、一体何を見てるのかしら？

「触媒を用いずに、或いは複数の英霊と縁を持つ触媒を使いサーヴァントと召喚した場合、自分と似た性質のサーヴァントが呼ばれる。故にもしやと思つて貴様の魂を見てみたが……」

張飛は言い淀んでいるようだった。

——言つてみなさいよ。

とセレニケは促した。

「では、遠慮なく。お嬢ちゃん。お前、相当なろくでなしだな」

セレニケは落胆した。

そんなことを言うのを躊躇ったのかと。

いきなり召喚者を拘束するようなサーヴァントを招くマスターがろくでもない人間であることなど態々論うまでもない。

第一、祖母を殺されたあの場面で復讐心に駆られ激情の下で張飛を殺そうとしたのならまだしも、至って冷静に自己保身のためだけに自害を強要出来る人間がろくでなしでないわけがないのである。

心の内を読んだ張飛は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして、セレニケから離れ酒をおる。

「……それについては悪く思わんでくれ。召喚に応じるということには俺にも目的がある故に。易々とは死ねん。鈴々の毒を注いだことも、こうして冷静な話し合いが出来る場を作ったことも総ては詮無きこと」

セレニケとしては張飛と冷静な話し合いという概念について一晩議論したいという気持ちが強かった。

一方的に自由を封じ、片方の圧倒的な優位に於ける言葉の交わしあいには普通議論とは呼ばない。人はそれを尋問という。

「他方が自害を強要出来、しかもそれを実行する意思があるという前提で行われるものもまた話し合いではないがな。と、与太話はこれくらいにしよう。まずお嬢ちゃんが俺

の主であるということは流れる魔力からも疑いようがないが……名前はなんという？」

そう訊ねながら張飛は肉と共に酒を流し込む。

その問いはセレニケにしてみれば意外なものであった。サーヴァントとマスターの關係は基本的に聖杯を求める為に互いを利用しあうだけの利害關係であるというのが彼女の認識であつた。

その上でマスターにとつてサーヴァントの真名は能力を知り、弱点を知る上で重要なものであるが逆は決してそうではないと思つていたから。

「馬鹿馬鹿しい。人は損得のみで動くものじゃあない。特に俺は、その場限りの激情と刹那に流れて消える興味でしか動かない。そして俺は、俺と似たろくでなしのお嬢ちゃんに興味がある」

逆にセレニケは張飛について全く興味はなかつたがだからと言つて、答えない理由も見当たらず、セレニケは自身の名前を心の内で呟いた。

——セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアと。

「セレニケ、か。どうにも言いなれない響きだ」

名前について張飛は率直にそう感想を漏らした。

「何故、聖杯を求める？」

次に聖杯戦争に於ける通例。聖杯を求める理由についての質問をした。

帰ってきた答えは張飛の予想を裏切るような答えだった。

——無いわ。

「ない、というのはい？」

——願いなんてものは何も。私は祖母に戦うことを望まれただけ。メリーウエザーは死んだから、もう私には戦う理由なんてない。

「……そうか」

と張飛は淡々と言葉を返した。

しかし、事実なのだからしょうがない。戦う理由がなくなった以上は億劫でしかないのだ。

それに話してみれば、一見理解不能の狂人にしか見えなかった張飛は意外にも話がかかる人間だ。

このまま自分の物臭で足を引っ張ることも決して自害を命じることも多少なりとも気の毒に思う程度には。

故にセレニケは主従契約を解除することを試みた。

が、その時——

「待て」

張飛が突然声を上げた。

「囲まれている。恐らく術師の類。数は三十ほど」

その言葉が意味することはつまりは敵襲である。

——敵襲……どうして？

「知らん。だが、このまま俺との契約が切れればお前が死ぬということだけは分かる」

すると張飛は『鈴々』と蛇に名を呼んで、セレニケの拘束を解き、自分の体に纏わり付かせる。

「折角の別嬪だ。ここで死なせるには惜しいと俺は思っているが……お前はどうかだ、セレニケ？ その綺麗な顔と体が、檻樓のように成り果てても構わない、か？」

その答えは言うまでもなかった。

Fate/Ouroboros 陰

・ウロボロス

尾を飲み込む蛇の図。永遠性、死と再生、循環の象徴とされる。

一匹の蛇が自らの尾を食むウロボロスと二匹の蛇が互いの尾を食むウロボロスの二種類があり、後者の場合は大抵“∞”の形を描く。

†

東京渋谷区。

日本有数の？華街であるがこの街はその足元に淀みを封印している。

そのの名前は渋谷川という。渋谷を流れる川であるが、普段はその殆どがアスファルトの下に封じ込められている為、人の目に映ることはない。

であれば、一般人が立ち入ることも殆どないということは言うまでもないだろう。

しかし、この日は珍しく渋谷川には来客があつた。一人は男で一人は女。

男の方は如何にも軽薄そうな若者で名を相良豹馬という。彼はその名こそ名乗らなかつたがユグドミレニアに属する魔術師だつた。

そして、他方はどこか憂いを感じさせる蠱惑的な女であつた。女——六導玲霞は相良

豹馬が行う儀式の生贄に選ばれてしまった哀れな犠牲者であった。六導玲霞は娼婦であつた。シリアルキラーは往々にして春を売る女を標的に選ぶというが、生贄を用いる魔術師もまたそういった女を標的とした。

そういつた女は大抵の場合天涯孤独であるために搜索願が出されにくい。秘匿性を重んずる魔術師にとつては逃え向きの生贄なのだ。

玲霞は豹馬の暗示にかかり意識を失つていた。そして最後まで覚醒しないまま、儀式が終わると永遠の眠りに着く筈だつた。

英霊召喚。嘗てイギリスを震撼させた人類史上初の劇場型殺人の主演、ジャック・ザ・リップパーを招く為にその殺人の状況を再現する。たつたそれだけの為に。

「答えよう。汝れは僕やつがれの主ではない」

しかし、豹馬の前にあつた現実は違つた。

湿つたコンクリートの上に描かれた血の召喚陣。そこに立つていたのは明らかにジャック・ザ・リップパーではなかつた。

それは男か女か曖昧な美貌の人物であつた。目が眩むような輝く銀の髪を腰まで伸ばし、透き通るような白い肌をしている。月を思わせる銀の瞳は涼やかで如何にも優し気だ。漆黒の鎧を纏つていたが、少しばかり奇妙な出で立ちであつた。両肩の肩当てがない。そして肩当ての下の服も布地がなく浮き出た鎖骨が艶めかしく映る。

この人物の趣向なのか？ 答えは否だ。この人物の体の形では肩に鎧はおろか衣すらまとうことが出来ないのだ。

何故ならこの人物の肩には蛇の頭が生えていたのだから。

飾りなどではない。両肩一匹ずつの蛇はそれぞれが生きている。

相良はその英霊の名に——両肩に蛇を有する魔王に心当たりがあった。その為に結論することが出来た。これがジャック・ザ・リッパーではないと。

「どう……して？」

魔術師としては二流もいところの自分がこんな化物を呼び出せてしまったのか。何故、ジャック・ザ・リッパーの使っていたナイフを触媒にしたのにそれどころではない殺人者が目の前にいるのか。

「何故か、だど？」

蛇を有する英雄は、豹馬が齎した疑問を勘違いし、腰に佩いた剣を抜いた。

そしてその刃を喉元に突き付け、

「決まっておろう。女子^{おなじ}を、弱きを傷つけてまで己の欲望に縋る。そのようなことは男子の——否、人のすることではない」

冷たく告げる。

「下郎、早々に僕の眼の内より失せるが良い。契約も今すぐ破棄せよ。この身に貴様の

魔力が入るだけでも、肉が腐るわ！」

ガチガチと顎が鳴るだけで、豹馬は言葉を出すことが出来ない。

体が震え、立っていることすらままならない。

なんとか死に身の思いで力を振り絞ると豹馬は叫ぶ。

「全ての令呪を以って命じる！」

サーヴァントに対する絶対命令権である令呪を三つ全て使うという暴挙に出る。

だが、豹馬はそうまでしなれないと思っていた。なるべく目を向けないように気をやっていた自身の未熟さ。その未熟さを自覚するが故に、豹馬はこの選択をしなければならぬと思ったのだ。

「命だけは取らないでくれエエエ！」

自分が助かる為には。

全ての令呪が起動し、その魔力が目の中のサーヴァントの身に降り注ぐのを確認すらせず、相良豹馬はバシヤバシヤと水音を立てながら脇目も振らず走り出した。

静かに、肩に蛇を有するサーヴァントはその姿が地下水道の奥の暗がり消えるまで見送った後に鼻を鳴らした。

「……汝れの命なぞそれこそいらぬわ」

そもそもこのサーヴァントには豹馬の令呪は効いていなかった。肩に有する蛇は魔

力を食らい宿主である魔王のものにする力を有する。それは令呪として例外ではなかった。

「……あの」

後ろからかけられた声に有蛇の英霊は振り返った。

「多分、あなたに助けられたのよね？ ありがとう」

暗示をかけられ覚醒した玲霞であった。

「感謝を述べられるまでもない。人として為すべき正義を為したまでである」

「為すべき正義？」

うむと英霊は胸を張って答えた。

「笑顔を守る。その為に明日を生きる未来を守る。星の目指す未来とは人々の笑顔が溢れる世界であるが故に！」

玲霞はポカンと口を開けた。

吐かれた言葉が綺麗事に過ぎたからではない。あの綺麗事を本気で言っているし、本当になると信じて言っているように聞こえたからだ。

「さて、では僕は往くぞ。さくらば」

と玲霞が呆けている内に英霊は勝手に歩き出そうとしていた。

「待って」

その手を慌てて玲霞は引いた。

「行かないで。貴方にお礼がしたい」

「礼などいらぬと言った筈だが？」

「でも、私は命を救つて貰つたから」

その言葉に英霊は嘆息を漏らす。

「おなこ女子よ、これだけは覚えておくが良い。誰かを生かしたいと心の底から思い、そのよう

にしたものにとつての礼とはその者に何かを与えたり何かを為したりすることではない。只、己が生きることなのだ」

生きる。

英霊のその言葉が逆に玲霞を焚き付けた。

「だったら、私を連れて行って！」

「何故、そうなる!？」

「貴方は生きることがお礼になると言った。だったら私がこのまま帰ることはお礼にならない」

何故ならば、玲霞は——。

「だって私は生きてなんかないから！」

生を感じてなどいなかったから。

幼い頃に両親を亡くし、引き取られた先では虐待を受けて過ごした。その後は誰にも愛されることなく、必要とされず、ただ薄ぼんやりと時を流れるだけだった。

もしそれが変わるとしたら、この人の往く先であろうと玲霞は思った。

初めて心が突き動かされたかのような綺麗事を言ってみせた人の。

「強い言葉を使うな！」

この時、男か女かその境界が曖昧だった英雄は、初めて男の顔になり激怒した。

肩の蛇が牙を剥き、玲霞の頭をいつでも丸？みに出来る位置で止まる。

「鬱陶しい！ はつきり申すぞ！ 僕に主は必要ない！ 故に汝れなどいらぬのだ！」

嘘だった。

主が必要ないということがではない。このサーヴァントは竜種改造という特殊スキルを持つ為、本当にマスター不在のまま現界出来るサーヴァントであったからそこに嘘はなかった。

嘘なのは、鬱陶しいという部分であった。

疎んじるわけがなかった。何故ならばそれが命というだけで、誰かを愛し誰かに愛される人というだけで彼にとつては愛すべき人であったから。

だが、愛すべき人間であるが故に、敢えて男は攻撃的に振る舞う。

「汝れは僕を知らぬ。僕がどれほど恐ろしい怪物だったかを知らぬ……僕が人を食ら

生き続けたことを知らぬ！ その無知で物を語るでない！」

これは男に出来る最大の警告であつた。

だが、

「生き続けたなら知つてゐるんでしよう？　生きるといふことがどういふことなのか」

玲霞はまるで恐れてはいなかつた。

男は沈黙した。そして悟つた。

この女には人並みの我執すらないのだということをも。

「……分かつた。そこまで言うならば、付いて参れ」

両肩の蛇を引かせると男は観念し歩き出した。

玲霞が追つて来られるようなゆつくりとした速さで。

「ありがとう。そういえば、貴方の名前を聞いていなかった」

「……ライダーと呼べ。汝れは？」

「六導玲霞。呼び方は好きに。貴方が望まないなら名前なんか呼ばなくて良いわ。よろ

しく、ライダー」

男——ライダーのクラスのサーヴァントはフツと小さく笑つた。

——この危うい女子に僕やつがれは何が出来るのか。

と内心では憂いながらも。